

## 資料 折口信夫「大嘗祭の本義」（小池元男ノート） 昭和三年（上）

著者	伊藤 高雄
著者（英）	Ito Takao
雑誌名	武蔵野大学日本文学研究所紀要
号	8
ページ	68-88
発行年	2020-02-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1419/00001094/">http://id.nii.ac.jp/1419/00001094/</a>

## 資料 折口信夫

# 「大嘗祭の本義」(小池元男ノート) 昭和三年 (上)

伊藤 高雄編

### 〔凡例〕

- ・本資料は、国文学者・民俗学者、折口信夫(釈迺空)が昭和三年度に長野県東筑摩郡教育会中央部支会にて行った講演を、学生で門弟の小池元男氏が筆記・整理したノートである。
- ・資料の解題は、國學院大學栃木短期大学國文學會の『野州國文學』第八十六号(平成二十五年三月)及び『國學院雜誌』第一一四卷第十号(平成二十五年十月)に報告しているので、そちらを参照していただきたい。
- ・本紀要に翻刻する資料は、そのノート番号35と6で、ノート35の表紙には「折口信夫先生 江戸時代文学史 律散文篇 豊科小学校」とあり、四十一頁に亘って「江戸時代文学史」が筆録されるが、ノートの反対側に欄外に「浅間校」と記して、以下「大嘗祭の本義」の講演が二十八頁に亘って記される。また、ノート6の表紙には「折口信夫先生 大嘗祭の本義 信州・本郷小学校」とあり、一頁欄外に「浅間小学校講演」と記し、四十一頁に亘って「大嘗祭の本義」の講演が記されている。なお、このノート6は裏表紙に「折口信夫先生 徳川時代文学史 豊科小学校 昭和三年六月」と記して、反対側の頁から「徳川時代文学史 於長野県南安曇郡豊科小学校 昭和三年六月八日―十日」と見出しを立て、「今度は散文及び詞曲のお話をして置きたい」とあって、折口による「徳川時代文学史」の講演が三十九頁分に亘って記される。このノートの内容は先のノート35に続くものである。両ノートは結局、長野県における、片や「江戸時代文学史(徳川時代文学史)」、片や「大嘗祭の本義」の、二度にわたる講演の記録であることが知れる。本翻刻は、その「大嘗祭の本義」を翻刻するものである。
- ・ノートはどちらもブラックのペン書きで、ノート35・6の途中には、「○第一日十一時より」、「午後一時」、「十時」、「第四 斎場」、「午后」、「第三日 九時」、「午后一時より」などと見出しを立てたところがある。これによれば、講義は三日間、午前・午後、講義が行われたとみられる。



なお、このノートとは別に、小池元男資料には、「大嘗祭の本義」の抜き刷りがある。その末尾には「昭和三年七月一・二・三の三日間 長野県東筑摩郡教育会東北部支会にて 小池元男筆記」の注記がなされている。『古代研究 民俗学篇二』（昭和五年六月 大岡山書店）に収録された「大嘗祭の本義」は、新版全集3の解題によれば「昭和三年六月二十九日・三十日 東筑摩郡教育会中央部支会（今井武志『折口信夫と信濃』昭和四十八年十月）」とされ、今井の同書を引用して「主として小池元男、小林謹一の整理したもの」と記し、しかしその「根拠は不明」とし、「二日間に関涉信州の講演は、現在知られている資料の中で蓋然性が高いが、講演筆記を未だ確認できないので、有力な説としておきたい」と記すが、本ノートはその小池による「講演筆記」である。なお、これによれば折口の講演は昭和三年七月の一日から三日の三日間、本郷小学校（松本市浅間）で行われたことがわかる。

・表記は、原則として漢字は常用漢字とし古典的仮名遣いとしたが、場合によっては正字を用いたところもある。また翻刻の整理に際しては、読解の便を考えて省略字体や文中・文末表現を若干整えた場合がある。翻字不明の箇所は、□とした。

・本翻刻に際しては、伊藤が翻刻を行い、元武蔵野大学助手の加藤歌子氏、國學院大學大学院生の柏木義樹氏（現神奈川県立相模田名高等学校教諭）、同じく百瀬顕永君、多賀谷蓮君、國學院大學学生の早坂尊晟君が加わって読合せをした後、伊藤が整理した。

## 大嘗祭の本義（小池ノート35・6）

本郷小学校（昭和三年七月一日～三日 東筑摩郡教育会中央部支会

〔欄外〕浅間校

大嘗の時でもあり、中心ある方が民族学の話のとりとめのつかぬ事を心配して、民俗の学より見たる大嘗祭についてお話。

今までの神道家にはわからない。民族学の立場よりせねば、神道家にはわからない。事実の事に関して話せば古代からの神事、祭の事をわかつて思つたので、古風の題を選んだ。

私の話は不謹慎に思ふかもしれないやうな露骨にむき出したお話を。大嘗祭に対して愛をもってお話する。そのため宮廷の陰事をも外へ出すことになるかもしれないが、私の家の生活がやはり然様のものであつた。末梢的事で憤慨しないでくれ。国家愛については私も皆に負けないものをもつてゐる。充分話さなければ、本当の大嘗、民間の祭の意義がわからない。先づ今日のところは贅祭と鎮魂式との二つ。

嘗祭に、にへと云ふのは天子の上りもの、神の上りものと云ふ事になつてゐる。普通はいけにへからして動物質の物と考へてゐるが、いけにへとは生けてあるにへ、いつでも用ゐられるものと云ふ事。にへと云ふ詞自身に神の上りものと云ふ事がある。たゞ上りものがにへで動物にかぎらず植物質も云ふ。にへと云ふ場合はにであるもの、生（なま）のものにへではない。生（なま）のものは

さうではない。今の神道のは生である。生け簀にあるものを目にかけて、いつでもさし上げるとして生のまゝ出す。さうするものと云ふ。本当は料理して上るのが当たり前である。生物を上る事は正式ではない。にへより出発して大嘗祭の話。

大嘗祭は、日本では、おほむべ祭と古くは云つた。おほんべについては二条の新嘗、大新嘗のところに置く。

先づ第一にまつりの語源。この事は何でもない事で、これがわからんと上代の文献の解決はつかん事が多い。まつりごととは政治と云ふ事でなく使つてゐる。朝廷の公事を全体にまつりごとと云ふ。例、をすくにのまつりごと。みいのちあがなひのまつりごと（御命贖政）等と云ふ。平安朝になつても檢非違使庁で着駄等、手枷・足枷をつける式を年中に一度する。祭、まつりごとの用法が、公事、又は役所の昔よりしきたりのある行事を云ふ事に用ゐてゐる。

もう古事記等には変な天子のまつりごとでなしに、広い政が出る。平安のみならず鎌倉室町以後でも大武家では政所といふて庶務をつかさどつてゐる。大昔より近代までつゞいてゐる。まつりごととは何か。―それにはまつるとは何かと云はねばならぬ。昔より諸説あれど同感出来ず。私は、まつるとまだすが対句になつてゐる。自分のする事がまつる。人をしてまつる事をさせるのがまだすである。mat—matsuru—madasu 対称的位置にゐる詞である。紀にもまだすを「遣」又は「令」と云ふ字を書いてゐる。まつる、まだすの語、まつといふ詞を考へると、まつは「待つ」と関係あるがやくす。

まつ―まつる、は服従する意あり。それをまつるふと萬葉などに用ゐてゐる。するとまつるには命に従ふ、服従する意あり。調べると、上者よりの命令どほり行ふ事がまつるである。命令を執行にやらせる事がまだすである。遣・令を書いてゐるのである。

後にはまだすとは人に物を奉る意に考へてゐる人もあるが、誤解である。人をしてまつらしめる意にまだすがある。

畢竟まつるとは日本の大昔に上ると、この国の仕事はすべて天つ国の仕事のうつしである。天つ国の仕事をそのまゝ、やつてゐる。神事の他、何事もないのである。この国に行はれる事は少なくとも天の神の命令を行つてゐる。天神の命を伝える事、執行する事がまつるである。それから變化して来て、天神の命令を執行した事を復奏する事もまつるとも云はれ、後世古典に専ら用ゐられてゐる。今までの意は、このまつる以前のもの。

一番古い書物の一番、用法は、かう出来上りましたと報告をするのがまつるである。神が人をしてまつらせるのがまだすである。神の命をうけてまつらせる人があつて、事が完成すると上に復奏する。この時に行ふ神事が即ち祭である。それが主に言葉によつて行はる。仰せによつてしたらばかく出来ました。それが、後ほど次第にまをすに変化する。奏もまをすと云ふ。内容が近づいて来る。申すとは上者の理解をするようにしむける事が申すである。衷情を訴へる、同情して貰ひ、自分の願ひを相手に入れて貰ふ事。申請など云ふ意がそれから出来る。大体意味の違いあれど、申すと祭との間に似寄る。この事は

後述する。

日本の天子とはどう云ふ意味で昔よりこの位置にあるか。日本の古書を見ると天子は食国のまつりごとを預つてゐらつしやる古書を見ても天子の祖先にこの土地を与へられたと考へるのは誤り。実は天孫にこの土地の仕事を代理者として仕事をおさせによこされた。用事が済めばそれでよい。天子のすめらみこととしての仕事はこの国の田のなりものを作るために天神のまだしをうけて下られて来、秋になると祭りをなして出来た品物をお目にかける。それが仕事。

食国とは、をすは食ふの敬語である。今ではをすを食ふの古語の如く思はれてをすをさうした意味に用ゐる人もあるが、をすはお上りになる。をす国とはお上りになるものを作る国がをす国。をしものを作る国の意ををす国で表すやうになつた。をしものを作る国だから納める国となる。天子の治むる国だからをす国。後も実は Wasu へ 治む と云ふことが出来てゐる。私、疑ひない事だと思ふ。天照大神と御兄弟の月読の命の治める国が夜の食国と云ふ国となつてゐる。――夜食国――、これは先に云ふたをすとは違ふ。神の治める国の中の夜のものををす国と云ふ、をす国が二つに分れてゐる。

日本の古語は本物以外に口頭だからして言語情調、語感で分れて行く。記のことと紀のことと同じとする考へ方は誤り。時代と語る人多きために変化してゐる。をす国を祭るのが天子の本職。命令したのが天神。記紀は天照大神としてゐる。これは歴史上の事実と信仰上の事実との矛盾。歴史上では長い時間ずつ

と一系して治めてゐるが、信仰上では昔も今も同目的で、この土地に神の代理者として治めてゐる。領土にする事や、拡張することを信仰上考へず、天神の命でこの国へをす国のまつりごとをとりに来て居られた。天子は神の言葉を云ひに來た。まつり――神の詞の伝へ、――変化して報告――こ、では神の言を伝へにこの土地へ來た。今で働かねば結果は生じないが、昔は神の詞を云ひきかせると詞の威力で自然にさう云ふ結果が生じて来る。根本には土地の魂、スピリットの考へがある。土地の精霊が上神のおほせを伝へられて聞くと、その通りにせねばならぬ。天子の言ふとほり貴い人が云ふとそのとほり結果す。それがまつり――同時にをす国のまつりごと。天子の上るものを取り扱ふ仕事をしに來て、第一土地の精霊に天子の命令を伝へる仕事。すべて政の古用法は国土の上では天子と群臣との關係を考へると天子の言を諸国に伝へる公の仕事をまつりごと、申してゐる。すると今の神道家、国学者の祭政一致まつがもとで政治が出来たとする考へは矛盾。まつりごとが先で、その報告祭がまつりで、第二義である。天子のおほせを伝へることがまつりの第一義。まつりごとの方が一義に近い。天子は天の神のまつりごとを伝へに來た方。地方及びその他宮廷の場所で天子の言を傳達する人をまつりごとびと、云ふ。事務官をまつりごとびとと昔より云ふ。大夫（宰）等の字を書く。第三等位の地位で、実務取る人。それ等も詞の歴史をしらねばわからぬ。書記官的人をまつりごとびと、云ふのは、朝廷の命を傳達する人は下へ下る。日本では上より下へ次第に代理者が出来て行くのである。



さう云ふ人をみこともち（宣言職・御言持）と云ふ。みこともちとは神の詞をば伝達する事。もつとは伝達と云ふ事。天子も天つ神のみこともちで、そのみこともちがまた出来る。天子のみこともちは天子のする事を代役してゐる。次第に重なつてゐる。根本に神の代理をする人は神で、その神より出た詞は先の神の詞と同威力を有すると考へる。例へば、日本の天子には神ながらの道と云はば、天子のすることすべて神隨の道と云ふ。神道ではない。天子を神そのものと考へるのを神ながらと云ふ。神の威ある方。神ながらも變化してゐるが、根本は神の代理者であつて、同時に神の言の威力で神と同資格の人と云ふ事。それを行ふのが、神ながらの道。みこの詞で道德的に考へるのはあやまり。

天子が神となる。天子の言は神より伝へた詞で、その詞が同時に神の詞となつて来る。日本の古代の信仰は御言持の思想が重つて來てゐる。次第に世が進むと下のものも上のものと考へ、天子の言を受けた人が天子と同資格と考へるところから下が上をおしのける様になる。鎌倉時代の下剋上は昔よりの信仰に易の詞をあてただけ。この事も限りのない話であるが、この事を云はねば、にへまつりの事が知れない。

およそ、古代の祭り、まつりごととは、穀物をよくならせ、徴発する意味の公事をまつりごとと申し、その出来たと云ふ報告をまつりと云つた。天子がこの地に下つたと云ふ事は、をす国のまつりごとを取りに來られた。天子が国々へ人を派して田畑をよくするのが、をす国のまつりごと。天子が五穀を作るのは天

神の命である。その結果の報告がまつりである。そのまつりを行ふ事が一年の終りを意味する事となる。かく出来上りましたとなると、年が次の年に代る。少くとも天子の仕事では年の暮のなりものの出来たと云ふ報告祭が一番大切。そのまつりが大嘗祭、おほんべ祭で、おほにへと云ふてはいけなひ訳がある。新嘗とおほんべとの別は申さずとも今の人にはわかる。毎年行はれるのが新嘗。一代一度のが大嘗。ところがことばは、にひなめとは用語例を集めると、嘗は支那の字である。新しい穀物を新嘗と云ふのは、やくにすぎず。新物を上るのは、にひなめでない。

新しいものを上るのをにひなめとは云へぬ。なめるに食べる意なし。にひを何しても新穀を上る事にはならぬ。支那の字を当てたのである。日本人は当て字の事実が上手である。民間の漢字はすべて当て字である。当て字の習慣に吾々は一度見ねばならぬ。新嘗は上手な当て字のために迷ふた。私は新嘗の語源は別にあると用ふ。紀の古注にこの詞をにひなひ、前にはにふなみ、にへなみと書いたところも他にある。するとにひなめ、まで四つ集めると、にひとなめとの重つて出来たとの説は不安になる。今でも庄内では大百姓は冬になつて、縄を庭で家族中で縄をなふ。それが済めば家に入る。古くは庭にかまどを作つて一日庭で暮らしたらしい。庭なひ行と云ふ。それからみると一種の精進禁慾生活らしい。庭で縄を綯ふと云ふ解釈は後のもの。庭で綯ふのは年縄との関係もあるが、庭なひとは庭で縄を綯ふからではない。紀にはなひと出て来る。四者を通じて見ると

少なくともにへ、には、にふは贅と云る。にはなひとは庭で縄を綯ふ事ではなくして、にはなひの行事の時に偶然に縄を綯つたのである。縄なひから、にはなひと云ふのではない。

ことば、なひ、なみ、なめ、にはなひ、にふなみ、にひなめ。

にひなめ、なみは、のいみと云ふ事である。にへの斎みと云ふ事がのみ、なみとなる例多し。四者はにへの斎み、神の上りもの、物斎み。奉るについての物斎み。ひとみ、とは非常に近い結局、五穀が出来た後ににへとして奉るとき<sup>おほにへ</sup>の精進。物斎みの生活がにひなめで、この行事の中心が上に食を奉る事である。かうして、その仕事をにひなめと云ふ様に考へて新嘗の字が当てられた。

にへとは神の上りものと同時に天子は神ながらの方だから、その方が上るものをもにへと云ふ。

すると、新嘗と大嘗との関係は、大嘗と平安に出て来るのは誤り。これは新嘗の大きいもの故、大にひなめが、おほんべと来て来た。

詞の上ではにひなめが先で、おほんべが後だとは云へる。事実、何れが先かは問題。おほとはにひなめ中の大きいもの故に大と云ふのでなく、壮大な意を表す敬語。私は毎年の新嘗に対しておほんべが一度にされてゐるが、古くはすべてが大にひなめであつた。おほんべとにひなめに区別なし。古くより国学者中にこの事を唱へてゐる。用例を上げてゐる。区別ない。根本は宮廷毎年行ふ時は少くとも御代はじめに行ふ事の繰り返しにすぎない。私も前にはにひなめは毎年行はれる、毎年の報告と考へ

た。そこから一代一度の大嘗が行はれると考へたが、事実は逆で、おほんべ祭に相当するにひなめが一代一度あつたのを毎年繰り返した。毎年せねば気が済まなかつた。宮廷では一度でよい事を毎年繰り返してゐる。それから考へるとおほんべの方がにひなめより古い。名こそ大新嘗である。それが今の様な区別が生じ、新嘗を毎年やり、新嘗の中の代表者を逆に考へる様になつた。私は大昔は大嘗祭が一度行はれたきりと思ふ。その理由をこれから云ふ。

### 第一日十一時より。

新嘗の話をしたが、新嘗とは、食を上るのみならず料理も上げ、その前に長い物斎みがある。たゞ神に穀物を煮て上るだけの行事ではない。民間ではその例は東の諸国に残つてゐる。奈良時代に残つてゐる。常陸風土記を見ると、筑波山に御祖神が天よりおりて来た。みおやとは、母神を云ふ事である。天に居られる御祖先と云ふ事ではない。常陸風土記のも母神が天より来て、富士娘のところへ行くと新嘗の夜であつたと泊めず、妹の筑波山へ行つたところが新嘗の夜であるが、母だからと泊めた。この話は新嘗の夜の物忌みの事を基礎としてゐる。根本は新嘗に神が来るのを新嘗だから母神でも入られないと話の筋がこんがらがつてゐる。万葉集卷十四に二首、新嘗の歌がある。大切だから前にも云ふが申し上げる。

にほとりの葛飾早生をにへすとも、そのかなしきを、外に  
たてめやも（三三八六）



誰ぞ、此屋の戸おそぶる、にふなめに、わが夫をやりて、  
斎ふ此戸を（三四六〇）

新嘗の物忌みの様子が明らかに出てゐる。

葛飾の里で出来たところのこの早稲を――食物を奉る式を云ふ――  
に――へしてゐる。人を誰もよせつけられない、家族もゐない、そ  
れだとしても、あの可愛い人を外に立しておかれようか、と云  
ふのである。

に――へすで、新嘗することを表す。誰だか、戸を動かしてゐる事  
は――にふはにひなめより古い――にふのいみのために我が夫を外  
へやつて慎しんで籠つてゐるこの家の戸を、誰だらう動かすの  
は。

この歌は新嘗の夜に来る者の印象あり。それが愛人が来る事に  
なつてゐる。新嘗の夜には――に――へをうけに神が来て戸を訪れる。  
それを迎へて一夜神と共にゐるのが、乙女の仕事。神の来る事  
が忘れられて、籠つてゐること、なつた。そして歌の様子が変  
つて来て、恋人を考へてゐる。この歌を見ると、家人も出てゐ  
る夜で、誰も家に入られないことが知れる。常陸風土記でも  
万葉の二首でも東国の新嘗の夜の嚴重なことが知れる。

もと神が来たのである。神になつた村の男がやつて来る。とこ  
ろがこの新嘗と似たものがまだ他にある。それは神嘗祭である。  
神今食、相嘗祭り、の三様の新嘗に似たものがある。

先づ神嘗祭より云ふ。神嘗祭とは九月に行はれる祭りで、新嘗  
祭と対照的に云はれる祭で、伊勢の大神宮に早稲の走穂を奉る  
祭だと考へてゐる。天子の新嘗以前の九月に神嘗祭が行はれる。

これより前六月に同様な事が行はれる。後世は六月十二月の十  
一日、神今食を行ふ。これは二度ある。六月十二月の神今食式  
に行ひたるものは早稲に限らん。早稲はない。神今食は古米を  
差し上げる。神道の上で神今食、神嘗、新嘗と明らかでなくて、  
困つてゐる。一番分れ目は古米を奉ること。何かと云ふと、神  
今食と共に行はれるのが月次祭、六月十一日、十二月十一日が  
平安の定め。年を二期に分けてやつてゐる。この月次祭の後に  
行はれるのが神今食。古来、神が来ると物を神に食べさせてか  
へる。月次の時には日本の大きな社の神が来る。それに天子が  
ものを食べさせて帰させるのである。神今食をカムイマケ等と  
云ひ、新米を奉ると云ふが、この説は成立せず。これは年に二  
期、大切な祭りをする型が出来てからのこと。夏の終りを年の  
終りとした時代に、年の終り毎に神が来る。これに御馳走して  
返す。これが神今食である。新嘗が二度に分割されて違つた月  
に行はれた事になる。十二月、神が来る、と云ふのが新嘗と同  
じのが、習慣が固定して両方行はれた。秋前、冬の終りと二度  
に行はれた。来る神がこの時にはわからん。それが月次祭で新  
嘗祭の変化、これについて行はれるのが、神今食である。新嘗  
祭を行ふ中に、変態な習が行はれた。それとや、意味が違つて  
神嘗祭が行はれて九月に行はれた。この神嘗祭は、伊勢の大神  
宮に早稲の走穂がこの頃、諸国より奉らる。荷前とそれを云ふ。  
日本の古文法で、形容詞が下にまはつたもの。にぎき、のぎき  
のはつと云ふ事である。

国々から奉られる早稲のを宮廷で集め整理して、九月伊勢大神

宮に奉らる。それが神嘗祭と云ふ。これも元より神嘗と云ふたかどうか不明。新嘗の解が出来てから出来た詞。神のひなめを神嘗と云ふたと見るべきで、古くよりしか云ひしか疑問。これは相嘗祭と関連して云はねばならぬ。

諸国より米を奉るのは第二みつき、みたまのふゆと関係する。諸国より奉る稲穂の意味は宮廷、並に宮廷の神に服従を誓ふ。稲穂は神である。魂がある。

それがその国々の一種の富の魂である。つまり、それを奉ると絶対の服従の方となる。実はそれが健康の又は寿命の魂の意味にもなる。米の魂が身内に入ると強くなり、健康を増し、寿が伸び、富が増すとした。その大切のものを中央政府に奉り、天子に上げる事は、国々の魂を差上げて服従を誓ふ事となる。大切な事で、これをみつきと云ふ。普通、みつきと云ふ。簡単にはつきと云ふ。

その稲穂は、天子自身上らずに、それを天子より上の方なる伊勢大神宮に奉らる。して奉つたものが後世の奉物同様、料理した米と、料理せずに掛けておいて何時でもお思ひの通りにするかけちからと二通り。今日では到来物だから差上げるのは変であるが、も一代前では到来物でなくても到来物といふたのは、我々の家では、本家—小本家—子方。

子方より来たものを次第に上へ奉ると奉物の効力が強まる。どうしても上の人、上の家へは物を奉らねばならなかった。属国の貢は自分のものとする先に自分のものとする先に、自分の上の人、又は神に上げねばならぬ。だから天子も伊勢へ上げた。

魂を奉る事は後述。それが伊勢への絶対の尊敬を表す事となる。神嘗と新嘗とは、すると大部違ふ。新嘗は後世刈り上げ祭りの如くなるが、実は報告。神嘗の祭りは、諸国よりの奉り物を上の伊勢に奉る。ところが天子が諸国の稲の魂を上<sup>ミ</sup>に奉ることはまだある。それは相嘗祭り。十一月になつて行はれる。普通新嘗、おほんべ祭は十二月卯<sup>ミヅ</sup>の中日の、二度の時は下の卯の日に行ふが、相嘗は上の卯の日に行ふ。天子、新嘗より一まはり先この時は畿内の大社に奉る。その大きな社に奉るのを相嘗と云ひ、陵墓に奉る—天子のお血筋、外戚の墓に奉るものを、荷前と云ふ。地方よりの初穂を整理して九月伊勢へさしあげた。陵墓、大社、神へ奉るときは相嘗。墓のは荷前と云ひ、使者を荷前使ひと云ふ。新嘗と前後して行はれる。もとは神には相嘗。天子の尊敬する神、天子の続きの人々に与へるのが荷前。その後新嘗が行はる。正式には十二月中の卯の日。果して干支を用ゐることは大昔からか。しかし干支の方が日で数へるより古い暦法である。支那の暦法を伝へた漢人種、朝鮮人が天孫族以前より居た。

その以前は日を占ひによつて定める。祭りを占ひで定める。その次は干支、次は日で定める。十一月の中、又は下の卯の日に新嘗をする。これを秋の祭りと云ふてゐる。祝詞中に龍田風神の祭の祝詞あり。—大和龍田の神に五穀の成就を祈るもの—五穀が実れば秋の祭りにかくかく奉ると云ふ。秋の祭りを数へると、神今食、神嘗などあるが、この祝詞で云ふ秋祭りとは新嘗祭であつて、今云ふ秋と考へ方が違ふ。農に係る詞で、田

畑のなり物のあがる時が秋で、その報告祭が秋祭で、十一月である。相嘗と考へても矢張り十一月の上卯の日頃になる。相嘗祭は龍田中に入つてゐない。書いてないから昔よりないと云ふ事ではない。中世に止んだともなる。

新嘗、相嘗を考へても今の曆法上の秋でないのに秋祭と云ふ。秋の考へが違ふ。地方の秋祭は早稲の刈り上げになる前である。晩稲刈り上げ後の祭りは正式でなく、家々の祭りである。早い秋祭は、稲の花の中にやる。その理由は色々あるが、第一に宮廷に奉る荷前使ひを京都へ出す時に、国々では国々の神の祭りをする―宮廷へ奉る知らせに―すると天子の新嘗前に国々では神に早稲を奉つてゐる。神嘗祭と前後して諸国で国の神に奉つてゐる。神嘗祭と前後して諸国で国の神に奉つてゐる。秋祭りははじまり。も一つ後の理由と思ふが、花の散つて後が大切だからそこで祭りをする。

その考へがより合つて秋祭りが出来た。正確には今の秋祭りは本当の秋祭りでない。社のと家のと違ふ。神嘗と同様のものが社のもの。天子の行事を中心にして考へると地方で勝手にやつてゐるが、まんざら認容できぬ事もない。「にほどりの」の歌も、新嘗を地方で出した後に、宮廷のより先のものである。

宮廷の新嘗は、一番後に日本の稲の総計だとしてやるのがもとの意味だと思ふ。秋祭りは意味二様あり。一方は殆んど冬祭とも云るほどである。秋の祭りが同時に今日の冬祭であるのになぜ冬と云はぬか。秋は報告で祭りの古意に合つた祭りで、冬の祭りは意味が違ふ。時期は秋祭りについてゐる。

私の考へは一夜の中に秋、冬、春の祭りがついてゐた。年極つて宵、秋、夜半、冬、明け方が春。それが曆法上、秋、冬、春が間かあられ、後に夏の祭が出来た。

冬祭りとは何かと云ふと、これは年が極まつた時分に神が来て、今年の稲の出来たものを受けて、その後、家主の健康を祝福する祭りである。文献を見ると、秋祭の夜必ず貴い人、或は神の事を忘れても、貴い人に来て貰ふ。後世の正客の習慣が昔よりあつた。新嘗の秋の祭に来るのが神であつたのが、人を迎へるようになり、その人が新嘗祭の後に主人に祝福をしてくれる。秋祭りは主人よりまれ人に報告する。その後に客人が主人のために祝福するのが冬祭り。

冬とは、殖ゆと今でも考へてゐる。ふゆとは分裂する、分れる、枝が出ると云ふのが、古典的用法である。少くとも冬の時期に分れるものがある、枝の如くに。その分れて出るものを取り扱ふ行事が、冬の祭りである。ふゆは昔はふると同じ。万葉を見ると、ら行とや行同じ。

今ではふるであるが、万葉では衝突。その前はふるは当たつて密着すると云ふ事である。

日本人の古代の考へでは、ある時期に、魂がつきに来る時期があつた。その時期は冬である。年極まつた時、外の魂を人の体につける。毎年毎年、魂をつける。今より云へば、魂の切り替へ時。日本人の魂信仰中に、すべて人間の職権力の源は魂にある。魂がつくとその人に勢力を生じた。すべて外来するものと考へた。まなである。外来魂が来て、つくとその威力で英雄と

なれた。そのつくことが日本ではふると云ひ、この魂のつくことを司る人々があつた。毎年、冬の時期に魂を呼び招ぎして、人体につける。すると、春より新しい力をもつて、その人が活動する。今日よりすれば一度でよいようであるが、一生一度の魂をつける考へが毎年した。一度でよい新嘗を毎年したと同様に。そして魂が毎年新しくなると考へた。

古信仰の冬祭りは、魂をつける祭り。ふる祭と云ふ事。それが意味が變つて魂が外からつく他に、ある時が来ると、その魂が分割する。元のものは減らずに、と考へた。それが第二義の冬祭りである。

再說すると、天子の威力の源を記録でみると、敏達代に天皇靈と書いてある。天子の尊嚴を持つための魂が天子につく。すると、天子としての威力が生ずる。それがふゆ祭り。その天子の魂が後にはその時期に分割する。それを人々に分けてやる。この魂の一つ一つのしるしは着物で示した。一衣に一魂と見て暮れになると、天子より親近の人々に、衣を配る。それを御衣配りと云ふ。天子以下の人々にも矢張り、藤原、物部、蘇我等は、その地位をもつ魂がついてゐる。それが分割するから部下にやる。それをきぬくばりと云ふ。それが後世まで続いてゐる。主人の魂を分割して与へる。これがふゆまつりの第二義。その祭りが鎮魂式である。これを日本の古語で云ふとたまふり、みたまふりと云ふ。後世、たましづめ、みたましづめと云ふ。たましづめとは人間の魂がある時期に遊離しやすいのを防ぎ、又は遊離した魂を落着ける。それは後の考へで、支那の鎮魂の

字をあてた頃の考へで、古くは外のを身につけ、更に分割した魂を人の内に入れてやるのが第二義のたまふり。

鎮魂は嚴重で、宮廷では十一月中日を卜定してした。ところがたまふりの祭りの中にも一つ違つた祭りがある。それはたましひをつける意を違つた意にして、人々が、自分の主又は、上の人に服従を誓ふために、自分の魂の主なものを上げて了ふ。自分より上の人には自分と同じ魂をもつ事となり、自分より上の人と云ふ事となる。自分の奉つた主なる魂と、上の人自身の魂を持つ事となつた。これが宮廷で天子の御代初めに行はれた。それが矢張り、毎年行はねばならなくなつた。これがみたまふりの一。

生きてゐる人々の魂を上の人に奉る。魂中の大切のものを上に取り、上の人々の魂の微弱なものを、頂いて身につける。この魂を奉ることがみつき。魂をいただく事をみたまのふゆ―天子の魂の分割したもの。そのみたまのふゆを行ふ祭りが、みたまのふゆまつり。つまり冬祭は魂の分割の祭り。年末に魂を分割し切り替へ、魂を目前に上げたり、いろんな行事が行はれた。それが後には年に二度行はれた。盆と暮である。それを盆と正月とに行ふ事になつて来た。

#### 午後一時

年の暮れの祭りの話をした。昔より秋のと冬のとは一続きの祭りであつたが、漸次、十一月、或は十二月にする習慣が出来て来た。たまふり、たましづめの祭りはどうしても年のつまつた

時でならない。歴史の考へが變つたから十一月になつたり、十二月になつたりする。前者、たまふりの祭りと云ひ、十二月のを普通、御神樂、内侍所の御神樂、と云ふ。兩者、鎮魂祭である。十一月のは古義の鎮魂祭。日本に元來あるもの。十二月のは後に宮廷に入つて來た魂の祭りである。これはたましづめの方になる。

申して見れば宮廷の主に魂を下より上げる。時期がだいたい一定してゐた。それがある国、或る家によつては違つた時期に奉る。大体、年の暮れに奉つたのが後には春、ところが、家によつては、たとへば出雲北島家の国造家では、国造の代變りの年と翌年と來て、魂のしるしを国から持つて來て、天子に奉る。一代二度である。

これと同様のもので、内侍所の御神樂が出來てゐる。宮廷でも伝來の古いものが正しいが、刺戟が少ないから新しいものを取り入れんとしてゐる。

鎮魂三様、

高天原より來たと云ふ、宇受壳——猿女鎮魂。

物部氏に伝はつた、石上の鎮魂。

も一つは、

奈良朝少し前に宮廷に入つたと見られる安曇の鎮魂。

この三通りの鎮魂法が宮廷にあり、早く猿女・石上は合体す。十一月。安曇の鎮魂は八幡神の信仰と一緒に來たもので、主として海人が持ち扱つた法式である。これが特殊なおもしろ味ある式故に、鎮魂法中、特別に扱はれて、師走になつてから

行はれた。内侍所の鎮魂——安曇の鎮魂は本当のたましづめとなつて來てゐる。詳しく云ふ要なし。

ともかく、それ等の話から鎮魂術は群臣より同時に、又は特別に奉られた証となればよい。同時に冬と云ふても、十二月、十一月、十月と色々考へてゐることを知つて貰ひたい。

この鎮魂を行ふと、天子はそこで新しく天子として威力をもつ。今日より云へば、鎮魂を毎年することはおかしい。一時ついた魂を毎年するのはおかしいが、昔の信仰では、かくせねば威力が減つた。御代はじめに一度のものが、細かく毎年に分けられた。この式を行ふと天子が復活した事となる。一年用ゐて疲れた魂が切かへられて新しい威力をもつ。

昔は、天子の御身は、魂の容れ物で、その身体をすめみまのみことと云ふ。天子の御身の名称。みまとは肉体の名称。昔より尊い御孫様、御子孫と云ふと考へてゐるが、それは後の解。本當は、みまとは身体と云ふ事。すめとは、天子でなくて、神聖と云ふ事。例へば、すめ神と云ふ。すめ神は皇室に關係なし。

非常な敬語である。神聖な、それが天子。皇族の専有となつて來た。その身体を尊敬して、すめみまのみことと云ふ。これに魂が入つて、はじめて天子としての威力となる。すめみまを奈良に合理的に考へた結果、貴い方の御孫と云ふが、御身と用ゐてゐる。魂の入る御身体様と云ふ事がすめみまのみこと。

肉体は變化するが、魂は一つのもので、肉体は變つても、魂が入ると、同じ天皇となると考へる。その証は、出雲国造家では、室町まで、国造に肉体上の死はあるが、親が死ぬと、子がすぐ



立つ。もと云ふ事はない。身は變つてゐるが、魂は一つであるから、代はらないから、もは考へてゐない。

天子の資格は、一つことである。その魂の入つた方を日の御子と云ふ。日の神の御子と云ふ考へである。日の御子になる資格がある方が、ひつぎの御子で、一代に幾人も居つて、一人ではない。二人、三人、もつとある。ひつぎの御子は、皇太子ではない。継承がやかましくなると、御子の尊と称して皇太子と日の御子と分けた。もとは、天子の代はりとなる人が撰定せられて、日嗣の御子と云ひ、更に選ばれて、日の御子となる。

前代が隠れて、後代がかはる間に、おほみものおもひ（大喪）と云ふ。この期間は、日本信仰上解釈すると、その間に日嗣の皇子お一人が、次の日の御子たる資格を完成する時と見る事が出来る。で、祝詞その他、奈良以前の詞を残す古い日本文学類に、天の御陰、日の御陰等云ふ。この詞の用ひ方は普通、天子の住む宮殿の屋根だと云ふ。天子は奥深い所に居ると云ふ事になる。しかし、この解は一番古い解ではない。しかし奈良にこの解をしてゐた事は事実。祝詞でも、いろんな意味に用ゐて、一語一意ではないことも知らねばならぬ。天の御陰・日の御陰の用法は、ある所では、この解をしてゐることは事実。天子が神聖な威力を外日にふれると、なくなす信仰がある。それは、天子になる前である。つまり前の日の御子がなくなつて、次の日の御子が立つ空虚の間である。その間を外日にふれない。これを日本古語でもと云ふ。私は裳と同様だと思ふ。

大嘗祭の、悠紀・主基殿中に蓐があり、衾が掛けてあり、枕が

ある。学者は、死骸の置いてあるしだ、天子の死骸の置いてある形だと云ふてゐる人もある。日本神道では、生死の分ちは嚴重のやうで、嚴重でない。しかも死と定まると嫌ふ。私は死んだ体ではないと思ふ。蓐に天子が籠る。それが鎮魂が済むと、みまのみことの空虚な身に魂が入る。すると、衾をどけて起きられる。物忌みのおほひが裳である。裳は、すべて裾の長いもので、今の用法と違ふ。敷物も、敷き裳と云ふ。着物の形のもの敷いたであらう。大嘗宮の衾は、被り物で、天子になられる方がぶつて居られて、魂が入ると起きて来られる。そして天子となられる。その裳の中にある間がある。大嘗宮の衾は、その意味のものである。平安より意味わからず、只、布団があつたのだと思ふ。人によつては、高御座と云ふ人もあるが、高とは立たねば云はぬ。布団の上で物は云はぬ。御代はじめ、大嘗宮で、蓐より出る式を行つた。後には固定して蓐を引くのみ。その手順するのは天皇霊がみまのみことに完全に入る間、その間に静さがやぶれ、ば魂が入らない。早良皇太子は、前天子がお隠れ後、女を近づけたため皇太子を辞められた。皇太子を廃立するほど嚴重な物忌みの期間をもと云ふ。支那のもと日本のもととはそれだけ違ふ。死んだ人の親族が籠るのが喪。日本のは資格を得るため、この宮廷の風習が下に及んで、やかましくなつた。宮廷のも、先進国支那風に説明されて、天子の御大喪が出来て来た。それがみまのみことの復活、よみがへりと云ふ事になる。

日本古代の信仰では、血統上では継承するが、信仰上では同じ

人。天照大神に關しては、各帝皆、同資格である。身体のみは仮で、魂は同じ。すめみまのみことが神聖な御孫様となつても、御子孫ではなくして、天照大神との關係は、同じく御孫である。比喩的に天照大神の御子孫だから、すめみまのみことではわからん。

天子は復活して、完全な天子となる。それが毎年行はれ、神今食・新嘗にも、蔭がある。それは大嘗宮中の蔭と同じもの、その中に入らねば、新威力は生じないと考へた。それで、その御布団を紀の神代卷二ヶ所、真床襲袈と云ふ——とこを覆ふ袈——にぎの尊が真床襲袈を被つて、この国へ降られた。その大嘗宮の蔭を考へるとわかる。皇太子の物忌みの生活を見るとわかる。物忌みの期間、外日をさへぎるものが真床襲袈で、これを取りはらつた時に完全な天子となる。

伝説が紀にある。これを毎年で云へば、新嘗祭後、鎮魂祭行はれ、宮廷では四方拝——元來の日本の方が道教の詞と合体して、今の風——天子が四方を元旦早朝に拝す——これ一続きの事。秋の祭りの新嘗と冬の祭りの出て来られる事、高御座になること一続き。それが暦法の変化によつて分れて、鎮魂は十一月、十二月にも、四方拝は元旦に、三分したが、実は一続きの行事でなければならぬ。

も一つ、附け加へたいのは、先に云ひ残した臣下より魂を奉る話である。日嗣の御子が日の御子となると同時に、天子としての仰せ言が下る。すると、その日の御子に向つて、群臣が一度に魂を奉る。これを寿詞と云ふ。この事は明日云ふ。

寿詞とは、正確な意味には寿を祝福することばの意である。すめみまのみことの身に魂が入つた後に、群臣が自分たちの魂をつける。自分等の威力の源を奉る。これほど完全な服従の誓ひはない。——大和の魂を天子が持てば大和の主となり、物部の魂を奉れば、天子は物部を治める力を生じる。この詞が寿詞で、これを云ふてゐると、天子の身に魂が完全につく。

その魂のつけ方は、前述した宮廷の鎮魂祭の中、猿女と石上とありと云ふたが、猿女のは、本来、日本にあつた。石上の鎮魂は、大和の国を治むべき魂をつける式である。大昔、神武天皇が大和へ入る時に、長髓彦に敗れ、再度に大和へ来られるのに先だつて、長髓彦の仰いでゐた、長髓彦がその人を立て、ゐた饒速日命と云ふ方が、神武天皇と名告り合ひ、証拠品を見せて、妥協せられて、長髓彦は、もと魂である。それが神に翻訳された。この魂は、大和の国を治めるものにつかねばならぬ魂で、長髓彦を離れて、神武につく。

この魂を扱つた家が物部。ものとは、魂。平安のものは怨霊である。万葉集では鬼と書いて、ものと云ふ。魂である。それを扱ふ家が物部で、大和の魂をつける事を扱ふ家が物部である。故に大和朝廷に天皇霊の他に大切なものは、大和の魂である。十一月の猿女の鎮魂の他に石上の鎮魂が重要視せられたのはこのためである。鎮魂祭の式を見ると、ごつちやになつてわからぬ。本来ならば、猿女のみでよいのに、この時に石上のがまじる。それは大和を治める力を得るためである。せなければ、大和の国を治める力がないからである。

ところが、大和の国を治める力が出来て来るが、一方猿女の鎮魂を見ると、生死の区別が見える。日本の信仰では、生死が判らなかつた。魂がかへらんと定まつたときにあきらめる。その期間が、ほゞ一年である。殯宮、もがりのみや、あらしのみやである。殯に当るあらしの宮は、身を置いて魂をつけんとしてゐるのである。後には、この間にみささぎを作つてゐる、としてゐる。

この間を、大行天皇と支那の語を借りてゐる。生死が定つて居らぬと同時に、この御日の御子がもに籠つてゐる。昔、生死の区別のつかない例がたくさんある。今ではよく判る。昔は身が腐つても、魂が入れば生きかへると思つた。

猿女鎮魂の起原をとく天の石屋戸の話、天照大神が、岩戸へ入られた時に、鎮魂を行ひ、宇受売の命が舞をした。岩戸を葬式だとするのは、日本の昔の生死観を知らぬ人の事である。生死の不明の時に、盛んに鎮魂法を用ふ。遊離した魂が天照大神に入つたと云ふ事になる。

だから魂を付け直す事が必ずしも死を意味しない。まして大嘗宮の薨は、死骸のあつた印とはならぬ。完全に天子になる資格を得るために籠つた。

その毎年繰り返すのが、神今食・新嘗の薨。一度籠れば、籠るほど、復活して、力強くなる。休息を享けて来たものは、力強くなる。我々より見ては、死であるが、休息である。自然界の冬から春へ……等の如く、長い休息の間に立派になる。天子の上にも、さう云ふ復活を考へたために、前代の日の御子がなく

なつて、もに籠つて、次の日の御子になると、更に立派になる。天子一代でも、毎年新嘗で復活して、新しく強くなる信仰あり。蘇つた力を持つて、高御座の祝詞を申された。高御座の話は明日する。

春の祭りを中心とする。大嘗祭と即位式と四方拝。も一つ朝賀の式を兼ねたものである。――正月三ヶ日の中に行はる――春の祭りが、この四つを兼ねたものだ云ふ話をしたい。

現存する一番古い法制の書物、普通、大宝令と云ふが、養老令で、令の中の詔書式が載つてゐるが、五つの方式がある。主なのは二つ。それは、海外へ対する天子の詔書、他の三つは国内へ、大・中・小に分る。

国内の詔書の中、大事に用う詔書の書き方は、初のことばに区別がある。

明神御大八洲天皇詔旨、……咸聞

とある。あきつみかみとおほやしむぐにしろしめすめらがおほみことらまとのる……もろもろ……きこしめせ（とのる……古い）。国内への一大切の詔書、詔旨……おほみことらま……

この式を書物のはじめに書かねばならなかつた。奈良時代のはじめより行はれた。大宝令でもこの書法を用ゐたと思はれる。

養老令を見ると、この前に国外の国々へ与へる詞あり。大八洲の代りに御宇日本天皇とする。かく外へ対する時には日本と云ひ、国内へは大八洲と云ふ。この詞を唱へる場合は初春か、即位式に用ゐるのである。すると少なくとも詔書の上では両者を同等に扱つてゐることが判る。初春の詔書の全体の意味が即位

のそれと同意。

大八嶋がすべて私のものだ、と詞でお決めになる。と共に、宮廷へ示される詔書を受ける外人が日本の人となつて了ふのである。詞の勢力が人々に及んで、その人々の国が大和の国となる。だからこの詔書はやたらには行はれず。支那には云はず、朝鮮の任那の国を内屯倉と云ふ。これは、普通ではなく詔書、又は詞の大みことの中に内屯倉と云ふ事があつたのである。日本の天子の詔書を受ける人は、皆日本のものとなる。外つ屯倉で日本に物品を供する国を内つ屯倉と云ふた事があつたに違ひない。それが、天子の下さる詞の一種の約束である。詞によつて相手の人格等に土地が自由になる。大八洲国云々と云ふと、天子の領分となる。後にこそ大八洲と大日本を国内・外に分けてゐるが、昔は一つであつて、国内にも日本と云ふた。

この詔書の力の及ぶ範圍が皆大日本国になつた。詔書をそのまゝ、受けると、その通りになる。古くは両方云ふたのであらう。天子の云ふ……ことばの及ぶ範圍内が日本国である。

日本の国には歴史あり。知れる限りでは大和の国の山辺郡の大倭がやまとの本地で、それが拡つて、中央平原の東の地方、奈良の三三三のところから桜井の近く、天の香山の地が、やまとの国の第二義のもの。更に拡つて、大和一国。それより漸次日本全体に及んだ。仮定すると、紀等ある時期は日本の宮廷が筑前で栄へられた歴史あり。筑前の山門郡があつた。それが大和へ入つて、拡つて来られた。どうして、大和と云ふ詞がすべてに及んだかと云ふと、詔書式の詞に、「明神……」と、ある

詞の勢力の及ぶ範圍が従順な人の居る範圍が大和である。詔書式の、「おはやまと……」を考へねばわからん。戦争のみと考へてはいけない。

だから、ずつと古い時代は不明なれど、主として統紀―藤原朝より奈良朝、平安の都のかゝりまで書いた―この中には天子の名の前に、「大倭根子……天皇」と書いてゐる。記紀も統紀に近い時代の記は、かく書いてゐる。これは、御代初めに云はれた詞から出てゐる。「大倭根子……天皇」と云ふ事は、「根子」とは、山背根子、難波根子等あり。その地方の神事を主催する人、同時にその地の君主と云ふ事である。神事の上が「根子」で、「大倭根子」は大倭の祭りを統べてゐる人。これは、云はずともよいが、統紀の時代には、これがやかましく扱はれてゐる。これは、奈良に近づく、昔は口で天子の云つた詞を文書によるものが行はれて来た。専ら宣命と云ふ。―日本語で書く―この宣命が大体、飛鳥の末、天武末より文書の型式を持ち、定まつた文句が使はれて来た。日本国家にとつて、これは重大なること。これが即位のはじめに行はれた。春と即位が分れても、朝賀式の天子の詞、御即位式の詞もこれより始まる。宮廷の式は、皆、春のと即位のとに似た事がある。二者、違つたものでないと云ふ推定が下る。この昔から、即位と大嘗と同じと云ふ学者は沢山ある。やかましく云ひ出してから、二者分けたが、前は一つ。それが更に、春に行はれたものだと思へられる。この目当て、古書を読むと、問題が判る。

春の本義は不明。草木が芽を發することをはると云ふが、とも

かく、何のことか、不明。これも天子の云ふ、初春の詞に關係ありと云ふ。春の一番古い用例がまた不明。開ける意味はあるらしい。はるく、はるかす、はる、すべて開くといふ意味の詞らしい。

この春の祭りを民間の行事より宮廷を考へたい。

民間の行事では、今はないが、俳句の冬にさかさみの、又は岡見等出てゐる。日本全体ではないが、地方、地方で行はれ、俳諧の題の一つとなる。大晦日の夜、村の人々が、蓑を逆さに着て、小高い所へ上つて四方を見ると、来年一年の村里の様子が見えると云つてゐる。それを俳句の題として、岡見、逆蓑等と云ふ。この風習の起りは、実は里の人が岡へ登るのではなしに、春の前に嶺伝ひに下つて来る神あり。里へ来て、村の祝福をして歸つた。

蓑は、日本では人間でないしるしである。五月の田植の風が、百姓の日常生活の風となつた。すきのをの命は、爪をはがし、髪をむしり、皆取られたので、青草を蓑として下つて来た。後に民家で蓑を着て来ると、科料に処せられた。神が来ると、祓へをせねばならなかつた。

蓑笠は慎まれた。蓑笠は、門口でとるべきである。着て入ることとは、神が家へ入つて来るのである。

高い山より岡へ来て、来年の様子を云つた。除夜より春の朝へかけて、それが漸次、變つて、神として上る習慣のみ考へて、さう云ふ風な説明が出て、来年のことがわかと云ひ出した。日本開闢の歴史の天孫降臨も、山を尾根伝ひに下つて来たよう

に、紀の本文一書類、皆書いてゐる。何もない空虚な地を通つて平地へ。つまり日本へ下つた神は、尾根伝ひに下つて来た。これが、あらゆる国々村々にこの信仰あり。

除夜の晩から初春にかけて、行はれた。春は、吾々の原始時代に一度あつた事を、毎年繰り返す。原始時代に歸る。歴史は一年きりであつたから、一年すれば元へ返り、一番国の始めと春とは同じことである。故に、大和の国々で、初に云はれる詞は、に、ぎの尊が云つた詞と同じ。に、ぎがまどこおふすまをかぶつて、この国へ下つて来られた。つまり、日の御子の資格を得て、この国の君となられた。それがつまり、代々の天子の初春の行事の姿になつた。

元旦の詔旨は、後には書物となつたが、昔は天子が口づから云ふた詞。その他、天子の詞は皆、口頭。それが書物の形をもつて来た。天子の詞は、即ち神の詞と同じものである。神の詞の伝達である。その詞は、一口に云へば祝詞で、今、神主と云ふのは変意。本当は天子の詞。祝詞は、上より下へ命令する詞である。云ひ下した詞に行動が限定されるから、法、憲、制等にあたる。祝詞は、のりとき、のりたべごと、のりごとのつまりと云ふが誤り。なぜならば、正式に云ふ時は、天つ祝詞ののりとごと等と云ふてゐる。のりとがもとよりのりと云ひ、天つ祝詞の太のりとごとは、祝詞を讚美したのだと云ふが悪い。のりとは、少なくとも、のりを発する場所である。神事の座のことを、と云ふ用例を集めてゐる。のりとはのりを云ふ處。こ、で発するのがのりとごと。のりとの重言ではない。後、祝詞で



あらはすことになる。天つ祝詞の太祝詞言、神秘な天ののり場で下された、壮大なる場所の詞と云ふ事である。

のりと云ふ場所が、その土地では高御座である。これは、何をするところか。その意味は、天上の日の神の居られる場所と同じ高さの場所と云ふ事である。地上の考へを当てはめずとよい。祝詞を発すれば、高御座になる。要するに高きとを要す。そのためには、天の下を云ふ。少なくとも、天の直下と云ふこと。

天地交通してゐる。天と同じ価値ある天子の居られる処。その意が広がつて、天子の御所、国を云ふに至る。みかどは、御門である。御門内が御門で、それが天子の版図をみかどと云ふ。

わがみかど等と万葉に云ふてゐる。天子をみかどと云ふのは、万葉に一例があるに過ぎない。天子の居られる場所を広げ、天の下も広がつた。地上で天子の云ふことは、天上と同一となる。とすれば、だから地上に天の……の地名多し。

後人は、天から降つたと云ふ。そんなのは、天地が神聖な行事で、地上ながら天上そのものとなつて了ふ。ここに高いところを作つて、天子が云ふと、天で日の神が云ふと同じ効果。場所がのりと。その詞がのりとごと。それが漸次、移つた。天子は大和の神主で、一年中、神が続いてゐる。諏訪等は、年中、祭りをやつてゐる。昔は、嚴重で、神主は辛い。一番、日本中で辛いのは天子。とてもたまらん。女の巫女のさい後宮の方、早くやめたがる。そこで、祭りから遠がられる。すると、御言持が下に出る。中臣である。また、職が出来て、群臣中の高いものと天子、天子とそれに服従する地方、村々、国々の神主―

豪族、社の神主―昔は神主でなければ、豪族ではない。

大化の改新は、諸国から宗教上の力を取り上げて、豪族の勢力をそぐのが本場の仕事。国々の豪族が何故いばつたかと云ふと、氏々、村々の神主であつたからである。生き神たる天子と豪族との間に立つものが中臣である。天子と神との間に立つのは、中天皇で、万葉には中皇命、なかつすめらみこと、神と人間との間に立つ人、主として皇女、后。

天子と群臣との間に中臣が立つて、天子のみことを代理して伝達す。中臣は、とりつぎの臣である。つまり、中臣が天子の祝詞を伝へるとなると、勢力を得、中臣職の家が一軒に定つて来た。中臣の詞が、のりとごと。それが祝詞と云ふやうになつた。今伝つてゐる祝詞は、ほぼ延喜の―平安百年に固定―式に載つてゐる祝詞で、これは必ずしも延喜の時代のものでなく、もう少し前に定つてゐたもの。大体、平安に入ると、固定。以前のは変化したらしい。祝詞は、古いと信ぜられてゐるが、古い種の上に新しい表現法が加はつてゐる。神代からの祝詞は一部もない。皆、奈良中期の間に手が加はつてゐる。かくせねば、わからなかつた。口頭伝承中に自然に變つたのである。子供なら、そのまゝ、伝へるが、大人は直して了ふ。二様の變化がある。口頭の変化と時代相応にする。

祝詞中の手のつけやうのところが古い部分。祝詞は、天子の天から伝つた言と云ふ信仰のもとに、高座で云ふのが第一義。中臣に移つてから祝詞が下つて来た。正式祝詞は、中臣が仲介者として云ひ出す詞で、中が天子の詞である。

次第に神の資格が上つて来る。奈良の前頃より地方の神が宮廷より待遇よくせられた。神に位を授けられてゐる。宮廷以外の神は、土地のすびりつとの成り上がりで、天子の下であるから天子が位づけられた。神道家の説は、誤り。そのために、祝詞が神と対等で云ふやうになつて来た。大抵、この式中には、天子の方が神より下にあることあり。伊勢の大神宮。

これは後の寿詞にあたる申しごとである。まつる、まつりの詞である。祝詞には、いろんな意あり。本当の祝詞は、天子が高御座で云ふ詞。高御座がのりの場所故に。こ、で下さる春の詔が、一番大切。大昔、天子が新嘗後、即位する。昔は、即位の式あらず。まどこおすまより起きて、のりとでのりとごとを云ふと、春となる。大嘗と、即位式と、朝賀式は一続き。その間の四方拝とは、天子が高い所より臣、神に言を下さるのを、道教におしき□て、四方を、元旦未明に四方を拝すること、なつた。

昔より疑問とした。春、大嘗、即位は、私は一つと思ふ。すると、天子はいつ高御座に上つても春か、ではない。つまり、もに籠る時期に長短がある。昔は、もがそれだけでよい。即位後にもはないとは、支那の考へ。昔は、もに長短あり。それは、その頃より歴史を考へる人が高御座に来る日を定めた。それを日置部と云ふ。これは、既に民族に日置部考、柳田、中山。この考へは、私と違ふ。私は、日の運行を教へてゐる職業団体であるとしてゐる。私は、正しいと信じてゐる。日置は、日を数へることである。不思議にも天子が御自分の専有せられる民を

皆、日置部として地方へ出してゐる。大舍人部とも云。后のを、これに對して私部と云ふ。后之部、きさいつべである。きさいきさいちは、これより出てゐる。天子の管轄する民をひおきと云ふ。これが日を数へて、春になつた時にお教へする。高御座に上るのを春とするが、事實は實際の春と一つに考へてゐる。

## 十時

大嘗祭、奏上される寿詞を話す。寿詞とは、服従を誓ふために、自分の魂を奉る時に唱へる詞。国々に伝はる物語と、同じもの。それが、多くは、次第に変化して宮廷と氏、国々との関係のはじまりを説くことになつて来る。宮廷に仕へてゐる役人は、自分等の家の聖職の本縁を説く物語とを奏上する。物語と同時に呪術的の力をもつて来るものがのりと、普通云ふよごとになつて来る。宮廷に仕へる群臣は、もとより地方の豪族、役人は、地方、氏々を代表して、寿詞を云ふ。近世では、初春の行事、二度になつては、お盆におもかげをとめる。おめでたうは、目出たくいらせられい。寿詞の一番、大切の部分の残つたもの。自ら宮廷に昔から仕へた家と、地方の国々と、唱へることが違ふ。(以上、小池ノート35)

## 〔欄外〕浅間小学校講演

仕へた家は聖職の優位が古く、地方のは新しい物語である。神代の昔、五伴の緒の人々がついて来たが、この神は皆、一は中臣として伝達、一は斎部と云ふて、宮廷の清め、一は猿女、鎮

魂。一は鏡作、神の姿をうつす鏡を、一は玉作。この五種の聖職を司る家々祖先を、五伴の緒と云ふ。その他、この類のものは、つまり直接宮廷に仕へた理由を説く。地方の蕃族は違ふ。大嘗、即位、元且に一々云はねばならぬが、場合々々に分れてゐる。主として、春と大嘗。もとは三者同様である。皆が申した事は考へらる。後には簡単になる。

元且の朝賀の式とは、天子が祝詞を下さる式は、陰に隠れて、奈良朝、群臣がおめでたうを申し出に、飛鳥の末頃、氏々の代表者が出て、代表の氏の中の高位のものが出て、申し上げる。この時に云ふ事が、非常に厳肅、神聖な時であつたと思ふ。新しく服従をする。同時に宮廷に仕へる人々の、すべての誓ひになる。ところが、大嘗祭には、主として中臣氏が代表した。自分の家の職業を説き、天寿を祝福とすると共に、百官の代表をする。同時に諸国の寿詞が奉つらる。風俗、語部に譲る。こゝでは、中臣の話をする。

中臣は、後世では、中臣の天神寿詞を唱へる時は、大嘗祭の第二日目、辰の日に出るのである。辰の日の卯の時の第四天(朝)の時から挙式す。於て、豊樂院の庭上に、悠紀・主基の国とのばりを作る。悠紀方、主基方の囲ひ。やがて、辰の二天の時に、天子が臨御。悠紀に入られる。皇太子来る。群臣坐席、神祇官の中臣、南門より入り、膝まつきて、天つ神の寿詞を奏す。これは即位の式にもやつた。この点よりしても即位と同じ。

天神の寿詞は、実は中臣の家の寿詞で、古い故に天つ神とした。今日残つてゐる中臣の天神寿詞は、偶然残つたのである。それ

は、平安末の藤原頼長の台記中に、書とめられなかつた中臣の天神寿詞を書き留めた。つまり、近衛天皇即位した、康治元年の大嘗祭の時に用ゐられた中臣の天神寿詞を書きとめた。そのまゝ、減じるのが助かつた。中臣の天神寿詞は、決して神代からの伝へるまゝではない。わかりやすい。その祝詞の意味は、天皇陛下が、「現御神と……、なるほど左様です。」

あなたの前にお返事のしるしとして、天上より伝つてゐる祝詞を申します。昔、中臣の祖天の兄屋根の命が水を探しに、天の忍雲根命を天の二上山に登しまつりて、天の神に申し上げた。すめみまのみことの水は、天の水に人間の水を加へて上げねばならぬことを天神に聞いた。忍雲根の尊は、どうしたら水が得られるかと尋ねると、天の玉ぐしを下さつた。このくしを立て、夕日より朝日の照るまで、天つ祝詞のふとのりとごとをのれ。占徴あらはる。わかひるにゆつたかむらおひ出づ。その下より天の八井出でん。これを天つ水として上つたらしい。だからその後。わかひるとは午前十時と、私は若いひるの如く藪が出るであらうと考ふ。悠紀、主基の国の米に、これを混じて、飯や酒を天子に献ることになつた。天子、これを食べて、健康である。自分の家の聖なる由来を説く。魂のことは見えねど、中臣は水を司る家。水を司る家なる故に、その家から后が出る事となつた。水の魂を天子に奉つてゐた家である。由来を天神の寿詞で説く。それが水の魂を奉ると云はず、天の水を探した物語となつてゐる。一種の物語である。それを申し上げて、天子に自ら

の家で扱つてゐる魂を差し上げると、天子は中臣の勢力をもつ。中臣は、代表故に皆の百官の家々の権力の魂が、中臣の詞に乗つて入つて行く。かくして昔は、神事と家筋とは非常に一つで、離して考へられぬものであつた。

こゝに一例をとると、大伴の家は、宮廷の御門を守つた家である。大伴は、發達後こんなに成じた――とは、宮廷に属してゐるもの。もと大伴は、御門の番人。証拠は、記紀の門の神はおほとまべ（女）、大苦部、お、とのぢ（男）と云ふ。大苦部と大伴部と同じもので、門を預かつた役人であることが知れる。後世、こんな役人が増して、物部が門番するし、門部も發達して来る。大嘗（平安に、大伴は伴と云ふ）の悠紀、主基の垣の番をする人々として、伴の代人が出、門部の代人が出る。同じもの。系が違ふ。その他、物部もしかり。外来者を防ぐ、魂をしりぞける役。唱へ言によつて、これが後世に發達して、家から離れた、一の官吏を生ずる。近衛、衛門、兵衛、六衛府等、大伴部、門部、物部の次第に変化したものである。家々が職を失ふ。神事とともに職ある間は、朝廷が自由でないから、威をそぐために新官吏を作つた。大嘗祭の時は、復活して、この人々に行はせた。そんな家々は、すべて宮廷の官は、沢山の職業と官によつて宰領する家々と、多くの部下をもつた家々が沢山ある。部下の家々を、伴部と云ふ。部曲、かきべ、ともべ、とも書く。とものみやつこと云ふ。宰領がある。この伴造（平安になると、一種になつて、宮廷の除ひ、門番する伴氏の子孫を考へ、その部下を伴造といふ）、幾色もあり、色んな職を宰領し

てゐる。主は神主で、伴造の職で、宮廷に仕へる。天子が神主としてある時期は仕へらる。天子の職は、ずっと続いてゐると同様、とものみやつこ、中臣、大伴、齋部の氏の主等は、定つた神格であつて、人は變つてもずっと伝へてゐると見らる。

その間に、考への矛盾が出る。武内宿祢は、古伝では長生きの人で、その和歌は、記・紀、伝へが違ふが、仁徳、応神に寿詞を奉つてゐる。本宜歌と称して、摂津姫島河内の、雁が子を生んだ、珍らしい、と云ふので、本宜歌を作つて奉つたと。すると、武内宿祢（大和の葛城氏の分れ。蘇我と同じ）の家は、一種のほぎごとを申す職を有し、その歌が本宜歌として記紀に残る。これを唱へる資格が、武内宿祢である。人が代つても、神格は一つである。従つて、長生きの歌を司る人故に長生きだとも、長生故に長生きの職をすると考へらる。その職は、武内宿祢の名でなくては継げない。人は替るが、神事にあづかる名は一つで、どの家でも皆ある職を行つて、さうした関係で、家の主―氏主、職の主としては、伴造として永続す。神聖な職、後世になつても大嘗祭に思ひ出して用ゐた。平安には忘れられて、門部と伴部の代人が出ること、なつた。（次号に続く）